

彙報（昭和三十三年一月—三十四年三月）

図書関係事業概要

昭和三十三年度における主な事業は、次の通りである。

一、出版

桂宮本叢書第八卷 私家集八 一冊 二七〇部 (市販) 養徳社

(内容) B6版 三三八頁 鎌倉後期の十歌人、十集を収めた。即

ち右近少将雅頴集、越前々司平時広集、沙弥蓮愉集(宇都宮景綱)、

為信集、自葉和歌集(中臣祐臣)、權大納言俊光集、拾藻鈔(积公

順)、実兼公集、權僧正道我集、頓阿法師詠である。(三十三年三月刊)

刊)

桂宮本叢書私家集十 一冊 二七〇部 (市販) 養徳社

(内容) B6版 三三九頁 院政期より鎌倉後期にかけての女流歌

人十一人、十一集を収めた。即ち四条宮下野集、主殿集、肥後集、

郁芳門院安芸集、周防内侍集、摂津集、六条院宣旨集、秋夢集、權

中納言実材卿母集、平親清四女集、平親清五女集である。(三十三

年三月刊)

桂宮本叢書第十六卷 物語二 一冊 二七〇部 (市販) 養徳社

(内容) B6版 三三〇頁 いはてしのふ、しのひね物語、松浦宮

物語、恋地ゆかしき大将の四篇の物語を収めた。(三十四年三月)
さくめこと 影印 二冊 解説一冊 二〇〇部 便利堂

心敬の著わした室町中期の代表的歌論書、平瀬家旧蔵の改修本系

統、室町期の書写(伝心敬筆)。(三十四年三月刊)

台記(仁平二年) 影印 一軸 解説一冊 一五〇部 便利堂

宇治左府藤原頼長の日記、旧九条家本中から発見された、新史料で鎌

倉期の書写。(三十三年三月刊)

二、マイクロ撮影

昭和三十三年度における撮影書目は、次のとおりである。

東山御文庫本

伏見天皇宸記 四卷 五九コマ

後鳥羽天皇宸記 一冊 三三コマ

後深草天皇宸記 三冊 二五コマ

伏見天皇宸記 二二冊 一二六コマ

花園天皇宸記 一七冊 七八〇コマ

光嚴院御記 一冊 七コマ

後小松天皇宸記 二冊 一四コマ

宸後天皇宸記 二冊 一〇九コマ

後柏原天皇宸記 二冊 一四コマ

宸後西天皇宸記 二冊 一四コマ

猿	興	清	傅	宗	小	五	拾	拾	万
			大	牧	大	社	遺	遺	
丸	風	正	納	獨	吟	君	集	集	葉
			言	殿	百	百	抄	抄	
集	集	集	母	上	韻	注	註	抄	

一 一 一 一 一 一 一 一

後陽成天皇宸記
御產部類記 醒醜、朱雀
寛平御遺誠
村上
後深草天皇宸記
御湯殿上日記御抜書
樁葉記
新写記録宸記目録
歌道書類御集書
靈元上皇院中番衆所日

寅	桜	櫻	靈	宸	宸	靈	宸	櫻
町	元			親	町	元	元	町
天	・	中	御		天	天	天	天
天	皇	宸	翰		翰	翰	翰	翰
翰	皇							

一
三
三
三
三
三
三
三
三
三

三一ヨマタナ
六七ヨマタ
一二ヨマタ
六四ヨマタ
一一ヨマタ
三四ヨマタ
三〇ヨマタ
七九ヨマタ
三一七三ヨマタ

1串 1串

兼	公	斎	重	家	忠	実	主	藤	四	江	少	前	三	撰	か	唯	重	兼	朝	源	秋
忠	宮				度	方		原	条	宮	輔	位	中	將	入	ね	心	之	忠	輔	
盛	朝	女	之	持	百	中	殿	長	宮	下	道	權	將	公	定	す	房	女	順	夢	
臣	御				将		綱	野	百	長	長	典	廄	衡	首	み					
集	集	集	集	集	首	集	集	集	集	百	公	集	集	集	の	集	集	集	集	集	
江戸写	入	前	三	撰	か	唯	重	兼	朝	源	秋										
江戸写	輔	位	中	將	入	ね	心	之	忠	輔											
江戸写	道	權	將	公	定	す	房	女	順	夢											
江戸写	長	典	廄	衡	首	み															
江戸写	百	公	集	集	の	集	集	集	集	集											

二九 ロ ハ 一〇 ハ ハ
一二 ロ ハ 一二 ロ ハ
一六 ロ ハ 三四 ロ ハ
七七 ロ ハ 一九 ハ ハ
一〇〇 ハ ハ 三〇 ハ ハ
一五 ハ ハ 六二 ハ ハ
五一 ハ ハ 五 七 ロ ハ
二五 ロ ハ 四五 ロ ハ
一一 ハ ハ 七〇 ハ ハ
四〇 ハ ハ 二八 ロ ハ
二八 ロ ハ 二二 ロ ハ
二三 ロ ハ 二三 ロ ハ
二八 ロ ハ

一六四 壬午 七〇一 五〇 六〇 六 六六

四卷一
四卷二
四卷三
四卷四
四卷五
四卷六
四卷七
四卷八
四卷九
四卷十
四卷十一
四卷十二
四卷十三
四卷十四
四卷十五
四卷十六

一四〇	コヨ
一〇	コヨ
三〇	コヨ
二五	コヨ
六六	コヨ
六六	コヨ
一七	コヨ
一七	コヨ
一三	コヨ
九四	コヨ
五〇	コヨ
一一	コヨ
三四四	コヨ
三〇	コヨ
四〇	コヨ
六二	コヨ
六五	コヨ
一六一	コヨ
一九一	コヨ
二一	コヨ
一〇	コヨ
七五	コヨ

三、展示会

(希望者には) 难詠歌
秘詠歌
南朝官
南朝公卿
南朝公
南朝
南言道
仁智行
晦

恒例の展示会として、十一月伏見宮および九条家旧蔵縁起類展を開催した。その他学会、研究団体等の要望に応じ、適宜所望主題の展示会を開いた。